十七歳の従軍体験

伊井春夫
本町三丁目

昭和二〇年一月末、広島県宇品の暁部隊（船舶隊）に入隊しました。時に十七歳でした。

その後、門司にて乗船。そして使役として、門司の捕虜の作業の見回りをした時の事です。鉄道路線の作業に数人の白人が汗を流しておりました。私は配給されていた「ホマレ」に火をつけ、一服吸い、そっと捕虜の一人に渡しました。彼は喜んで数人で回し飲みしていた事が思い出されます。

そして数日後、危うくなった沖縄のため、特別船舶隊の一人に選ばれ、鹿児島に派遣されました。三六人でした。全員が十代の少年でした。門司の高台にあった八幡様の境内にて、隊長から全員に別れの杯が回されました。米粒の浮いた白い酒、それは「どぶろく」と称するものでした。その時、隊長米沢中尉はたった一言、「お前たちの命はおれがあずかった」と毅然とした内に涙声だったのが思い出されます。この中で、終戦後無事門司に帰隊したのは二人でした。帰隊後聞いた話ですが、隊長は隊員が可哀想で、紙に書いた名前を目隠ししてムチでたたいて選んだとの事でした。

ともあれ私たちは、沿道の日の丸に送られて鹿児島に着き、即日二百トン位の木造船に乗船しました。

私は操舵手として種ヶ島に、そして屋久島に数回の航海をし、最後に沖縄への決死の船団を組んで鹿児島港を出航しました。その時、私はソ満国境に従軍していた長兄（次兄は十九歳にて少年飛行兵として戦死）のもとに、「大君の御楯となりて行く我は死して護国の鬼と化しなむ」と歌を送って出陣したのです。真夜中、船団は船尾灯のみで静かに静かに鹿児島湾を航行中、私の乗った船は幸か不幸かエンジンの故障のため航行不能となり、船尾灯も消え波間にただよい始めたのです。その夜船団は山川港に寄港し、米軍の大空襲にあい全滅したとのことでした。私の友だちは、十数年の短い人生を、君のため、お国のためにはかなく山川港のもくずと消えて行ったのです。

翌朝空の白むころ、私の乗った船は桜島の有村沖に流れ着いたのです。そして一時そこにアンカーをおろし、軍への連絡を

取り、隣の古里村港に一か月近くエンジン修理のため止まったのです。

積み荷が米でしたので、船長は俵から米を少しづつ抜き、鶏や野菜と交換し、次の出陣にそなえたのですが、ついに直らず、鹿児島港に曳航されたのです。

そして数日後、鹿児島市は大空襲にあい、丸焼けとなりました。海岸通りを逃げまどう人々も機銃掃射にあい、ばたばたと倒れる姿はあわれとも悲惨なものでした。

生き残った私たち数人は三角の暁部隊に合流し、私は沢武人という国学院大出の見習士官（後に少尉）とともに、天草の本渡の「ようとう司令部」にまわったのです。長崎に原爆の落とされた日も、下宿の裏山で沢隊長とともに、もくもくと上る煙を驚きながら見ていたのです。

さらば元気で居ておくれ
長の別れの朝となる
恋の鹿児島あとにして
夢はほのかよ、ああ消えて行く

二度と逢えない二人なら
胸の写真がまどろいぞ
晴れの特別船舶隊

君と二人で、ああ体あたり
若しも戦死と聞いたとて
泣いてくれるな彼の人よ
白木の箱がとどいたら
抱いておくれよ、ああ想出に

—昭和二〇年七月作—

仇な黒髪一筋に
燃ゆる情けの紅しごき
流す涙も君故に
何で忘られようか、ああ彼の人が

今日の出船に武夫（まずらお）が
涙かくして船を出す
永久（とは）の別れか鹿児島は
波の彼方に、ああ消えて行く

泣いてくれるな鷗鳥
想い遙かな鹿児島は
波の彼方かブリッジで

握る眼鏡も、ああ曇り勝ち

波のしぶきに身は濡れて
仰ぐ夜空の銀の星
国に捧げた此の生命
何で惜しかろ、ああ若桜

—昭和二〇年七月作—